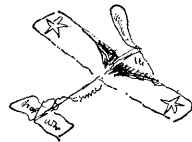


大人になってゆく子ども

成長発達のリズムと教育（上）

——思春期前まで——



伊藤隆二

はじめに

卵から、ときがたてば幼虫が生まれ出、その幼虫はときがたてば蛹に育ち、そしてその蛹はときがたてば蝶に変態する。

「ときがたてば」といういいかたは、もちろん自然（じねん）を重んじたものである。自然は人為を超えた、宇宙の大

きな動きそのものだといいかえてもよい。

その、いっさいの生きとし生けるものの成長発達のリズムを支配している宇宙の動きは、ちっぽけな人間の頭によってくみだてられた「科学」という名の経験的合理的認識作用では、もとよりつかまえられるものではない。

それは、頭にたよることを止めて、宇宙のうずにも心もゆだねて、おおらかに生きるという体験のもとで、感知できるものかも知れぬ。

ところで、人間も自然界に小さく位置をしめて生きる生物

「種」である以上、自然の成長発達のリズムの埒外にあることはできない。つまり、人間もときがたてば、一つの「節」をこえて成長発達し、また、ときがたてば、もう一つの「節」をこえて成長発達する、というように、「節」ごとに質的に転換しながら、変化しつづける。そして、いっさいの生きものに寿命があるように、「個」としての人間は、ときがたてば、必ず死ぬ。

教育とは、「いかに生きるか」という課題をつねに中心にすえた、成長発達を援助する営みである。が、同時に、教育とは人間が人間らしく死ぬことができるように準備することでもある。人間はいつか必ず死ぬということを知るがゆえに、「いかに生きるか」という重い課題が切迫してくる。

では、人間のばあい、誕生から死ぬまでの約七十五年間に、どのように変化しつづけるのだろうか。そして、人間の「節」は、いつ、どのような形で考えられるものなのだろうか――。

誕生から三歳ごろまでの成長発達を考える

人間の誕生とは、胎児が混沌とした人間関係のなかに、はじめて投げだされるときの一つのできごとである。胎児はときがたてば、呱呱の声をあげ、すぐさま、好むと好まざるにかかわらず、社会的存在として、生きていく。

では、いったい赤ん坊はなにかの理由があつて、この世にあらわれたのであろうか。否である。赤ん坊はそもそもこの世に生まれることを、自分で望んだのであろうか。否である。

芥川龍之介の有名な『河童』には、お産の場面がユーモラスに描かれている。「お産するとなると、父親は電話でもかけるように母親の生殖器に口をつけ、『おまえはこの世界へ生まれてくるかどうか、よく考えたうえで返事しろ』と、大きな声で尋ねるのです。」

で、もしそのとき胎児が「ぼくは生まれたくありません。だいいち、ぼくのおとうさんの遺伝は精神病だけでもたいへんです。そのうえ、ぼくはカッパ的存在を悪いと信じていますから。」と答えるならば、産婆は母親の体に、胎児を消す注射をするのである。

かりにわれわれの子どもが「人間的存在は悪だ」と知ったとしても、われわれにはもとより胎児を抹殺することは許さ

れていない。

人間の子どもは何の理由も目的もなくこの世に生まれてくるといふことを、「不如意」と表現することもできる。フロアノスの作家カミュは「不条理」(absurde)といふことばをつかっている。その好みのせんざくはさておき、理由もなく生まれおちた人間の子どもは、特別の障害をうけているばあいは別として、みなときがたてば、くびがすわり、ハイハイし、つかまり立ちし、そしてひとり歩きをはじめ。ものを、はじめは、手全体でにぎるだけであっても、やがて指先でつまみ、さじを巧みに利用して、ものを手に入れることができるようになる。

×

×

「ときがたてば」といふのは成熟のことを意味している。

ただ注意しなければならぬのは、「成熟」がそのまま自己展開するといふふうにとつては間違ひである。それは外的要因をうけいれ、かつ変革しながら、その内なるものにとり入れ、それによって内なるものを変革していくという力動的な関係を結ぶことによつて、はじめて可能となるからである。

赤ん坊に、あることが可能になるのは、おとなとの実際の

な共同な交わりによつてゐることは、多言を要しない。ソ連の心理学者レオンチェフは赤ん坊がさじといふ単純な道具を使えるようになるいきさつを、次のように説明している。

「……母や保母はさじで子どもにものを食べさせる。しばらくしてから母はかれの手にさじをもたせ、かれは自分ひとりで食べようとする。観察が示すように、はじめかれの動作は自然のままのやり方にしたがい、『手で掴んだものは口に入れる』のと同じようなやり方をする。かれの手にあるさじは必要な水平の位置を保たず、その結果、食物はナプキンの上に落ちる……。しかし、もちろん母は傍観してはいない。彼女は子どもを助け、かれの行為に干渉する。このようにして生ずる共同の行為において、子どもはさじを使用する機能が形成されるのである。子どもはいまやさじを人間的な事物として扱う」(傍点は伊藤)。

このことは赤ん坊の歩行開始にもみられる。赤ん坊の歩みはじめの状態をみると、けんめいの努力と歩行をやりとげようとすゝ意欲にみちている。そばでは母親が子どもの歩行を誘ひ、励まし、赤ん坊はそれに反応し、さらにその歩行という課題を達成しようとする。つまり、歩行は赤ん坊の主体的な課題達成の努力の成果なのである。

子どもが生まれおちたときから社会的存在だというのは、いいかえれば子どもの生存の場が人間的交渉の場であるという意味である。子どもはかわりあう人間と交渉しつつ成長発達する。

X X

では、外的要因いかによつては、子どもの成長発達をはやめることも(ときにはおそくすることも)可能であろうか。たとえば、早期からの言語強化によつて子どもの言語発達を促進させるとか、知能教育法の開発によつて子どもの知能指数を高めるといったことの可否である。逆に、子どもの生存の場における知的刺激を極端に低減せしめたばあい、子どもの知的発達に著しく遅滞するかという問題とも関連する。

詳細な、かつ信頼できる研究資料が手元にないので、明解な答は出せないが、かりに促進したとしても、あるいは遅滞したとしても、自然の成長発達のリズムという大きな視点からみるかぎり、それはごく小さなできごとすぎないとみるのが正しいのではあるまいか。

どのような環境におかれても、ふつうに発達していく子ども**の**ばあい、「節」はほぼ一致している。たとえば、ほぼ三

歳以前の子どもと三歳以後の子どもでは、つぎのようなちが**い**、(質的転換)がみられる以上、三歳ごろを成長発達の一つの「節」に設定することは可能だと考える。

(一)三歳以前の子どもは、かわりあうおとな(ふつうのばあいは母親)との共生的な生活に満足しているが、ほぼ三歳をすぎるところから、子どもはその共生的な生活と訣別し、同年齢の集団へ参加することを望むようになる。

(二)三歳以前の子どもの活動の範囲はせまく、同一視野内の刺激によつてひきおこされる単純なくりかえしに終始していることが多いが、ほぼ三歳をすぎるところから、子どもの活動範囲は急速にひろがり、活動の場面も重畳化してくる。それは子どもの記憶力の発達に裏うちされていることはいうまでもない。

(三)三歳以前の子ども**の**ことばは貧弱で、経験の言語による表現もかぎられているが、ほぼ三歳をすぎるところから**言葉も**増加し、奇抜な、そして豊かな着想による拡散的思考が可能となる。

(四)三歳以前の子ども**の**からだの動きは硬く、ぎこちないが、ほぼ三歳をすぎるところから、柔軟で力動的になるので、鍛えればまたたく間に、種々の運動機能を發揮するようになる。

る（自転車乗り、スケート、水泳、木登りなどは三歳すぎから、急にじょうずになる）。

× ×

いいかえると、三歳以前の子どもはかわりあうおとな（母親）の、何かに驚ろいたときの反応の仕方、しぐさ、表情、もののいい方、好き嫌いの感情表出、それにとりまくるびとのかもしだす雰囲気といったものを、そのまま吸収して、人格形成の基盤にすえていくといってもよい。大脳生理学の研究成果からは、三歳ごろまでは大脳皮質の前頭葉連合野以外の領域の脳細胞の髄鞘化が活発で、それはほとんど模倣（という学習）によってなされることが指摘されている。それにたいし、三歳をすぎるところからは、前頭葉連合野の脳細胞の髄鞘化がすすむことから、三歳前後は、人間の成長発達上の一つの臨界期といってもよいのではないか。

三歳前後から十五歳前後までの

成長発達を考える

三歳をすぎるところからあらわれる四つの特徴は、十五歳ご

ろまで、ぶつとおしで、つながっている。まとめると、「仲間を求めること」「活動的になること」「着想が豊かで、拡散的思考が深まっていくこと」「体的であること」となる。

十五歳という年齢を問題にする理由はいろいろあるが、整理すると、つぎの四つになる。

(一)それまでの自己外へひろがっていた関心の対象が自己内へ方向転換する（内省）。

(二)同時に、外的要因によるコントロールは、自己セルフのコントロールへ切りかわる（自覚）。

(三)理想的自我を想定するようになる（現実の自分との間のギャップを意識するようになる）。

(四)思考様式はおとなの形式的操作に近くなる（いわゆる仮説演繹的思考が十分に可能になる）。

これらの特徴が十五歳以前の子どもにはまだあらわれないが、それがほぼ十五歳以後に急激にあらわれる理由はまだよく知られていない。蛹から蝶に変態するのが自然の現象であるのと同じように、十五歳はそれまでの「子どもっぽさ」から「おとならしさ」へ脱皮する、自然の「節」であると考えられようか。武士時代の「元服」は十五歳の儀式であったが、それはその当時のおとなたちが、感覚的に十五歳をおとなの

時代への入口ととらえたことによるのだろうか。

X X

三歳前後から十五歳前後までの、ほぼ十二年の間に、よく専門家が話題にする「九歳の壁」が存在する。それは主として、子どもが時間を意識しているか否かを注目するところから、いわれるのである。

わかりやすい例をあげるならば、子どもが何かを要求したとき、すぐに叶えられないばあい、親はよく今はダメだが、こんど買ってあげようと慰めることがある。その「こんど」とは将来のことである。

将来へ及ぶ時間を体験的に認知している子どもは、親の約束に満足するのだが、そのような認知力のまだついていない子どものばあいは、「こんど」ということはの意味がわからないために、結果として、いま買ってもらえないという事実を激昂するのである。前者は九歳をすぎた子どもであるのにたいし、後者はほぼ九歳以前の子どもである。

つまり、九歳以前の子どもは「いま」という時・空間に生きていく（現在進行形の生き方）にすぎず、結果の重大性を意識することは少ない。しかし、九歳をすぎるところから、「い

ま」という時・空間からぬけ出して、過去——未来という「時間軸」による非現実的なひろがりを感じていく（未来形の生き方）。ここで子どもは事象の順序性、計画性、あるいは因果の構造をつかみ、推理力を発揮していく。

「九歳の壁」を突破できない子どもの思考は即時的で、かつ収斂的であるのにたいし、それを突破した子どもの思考の翼は、「いま」を離れ、われわれをとりまく時・空間を超えて、ときには宇宙へと羽ばたいていく。

十五歳ごろから、子どもは哲学、歴史、宗教、思想といった分野にかぎらない興味をひかれていく。あるいは自然の神秘、宇宙の謎（たとえば、宇宙は有限か無限かといった問題）に果敢に挑戦していく。

この十五歳ごろから、「人間が変わる」のである。それは昔も今もかわらない。思春期の到来（主として肉体的成熟についていわれることであるが）は近年、ひじょうに早くなってきたといわれることがあるが、こと精神的成熟の面では、そのような加速現象はみられないのではなからうか。

成長発達という、みごとに自然のリズムが一世紀や二世紀といった短時間で、急にかかわることなどありえないことなのである。

≡ つづく ≡

（神戸大学）